

# 現代語ダケの諸用法について

## —「形容詞・形容動詞＋ダケ」を中心に—

張 培

### 要 旨

本稿では、現代語のダケが形容詞・形容動詞に接続する場合の用法について、詳細に記述分析する。従来の「とりたて」「限定」「程度」という用語を避け、同一の観点から、ダケの諸用法及びその成立条件を明確にすることが目的である。原因を表すとされる「だけに・だけあって」、「早ければ早いだけ」のような慣用的な表現を含め、「形容詞＋接尾辞」の「(っ)ばい＋ダケ」、「～にくい・やすい＋ダケ」など形式の特殊な用例も併せて、「形容詞・形容動詞＋ダケ」の用法をダケに上接する語句の意味特徴によって分類すると、ダケの上接する〈対象要素〉が独立した個体なのか、確定できる数・量なのか、確定できない数・量なのかによって、〈個体指定用法〉〈範囲指定用法〉〈範囲提示用法〉に分けることができる。このような観察は、上接語句が名詞句・動詞句などの場合と並行的であり、また「形容詞・形容動詞＋ダケ」の用例の偏りも矛盾なく説明できる。

### 0. はじめに

現代語のダケについては、主に副助詞、とりたて詞とする二つの立場から数多くの研究がなされている。それぞれの立場において、ダケは程度と限定に分けられ、また形式副詞、形式名詞、とりたて詞などに分類され、用法ごとに記述される場合が多い。しかし、各研究では、ダケの分類方法や用語の使用などが異なり、統一的な見解は得られていない。このような現状に対して、本稿はダケの上接語句における「〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係」という新しい観点を提案し、諸用法の分化条件について分析することによって、ダケの基本的な特徴を明らかにしたい。研究対象として、新潮文庫の100冊を中心としたテキストデータから、これまでの研究でほとんど詳細な記述がなされていない「形容詞・形容動詞＋ダケ」の実例を取り上げ、文中の位置によって分類、分析する。

形容詞・形容動詞はともに事物の性質・状態・人の感情等を表す。この二つの品詞がダケに上接する場合、それぞれ「つめたいだけ」「好きなだけ」のように、接続の形式が異なるが、本稿は、上接語句の意味特徴を中心に分析するものであるため、ここでは、形容詞と形容動詞を併せて考察する。

形容詞・形容動詞がダケに上接する場合、ダケは基本的に上接語句の性質を限定する。例えば、(1)のダケは「早い」という特徴を限定し、他の「取り柄」を排除する意味を表す。これに対して、(2)の「好きなだけ」のように、量・程度を表す場合もある。(2)の「好きなだけ」は副詞句として「使うことができ」を修飾し、主体の願望の抽象的な量を表している。(1)と(2)は上接語の意味特徴によって異なる用法を示すと考えられる。

- (1) 【早いだけ】が取り柄、と返した。 (田辺聖子『新源氏物語』)
- (2) ところが、今はなんでも好きなものを注文することができるし、お金も【好きなだけ】使うことができ、ケーキなども山ほど、なんでも好きなものを注文することができたのである。 (トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

よって、ダケの用法を考察する際に、文脈において上接語句の意味特徴を具体的に分析する必要がある。本稿では、ダケの上接語句を〈対象要素〉とする。また、〈対象要素〉と同類である同じ〈集合〉の中に存在する〈他の要素〉の意味特徴も併せて考え、「〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係」という観点から、「形容詞・形容動詞+ダケ」におけるダケの用法および用法分化の条件について考察する。

## 1. 〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係

具体的な考察に入る前に、「〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係」について簡単に説明する。張(2010)では、〈対象要素〉〈集合〉〈他の要素〉をそれぞれ以下のように定義してダケの諸用法の分化について考察した。

ダケに上接するものには、「具体的な人・物・事」、「ある動作・状態・性質」、「抽象的な分・量」など、多様な意味を持つ語・句がある。ここでは、ダケによって示されるこのような上接要素を一括して〈対象要素〉と呼ぶ。ダケは〈対象要素〉を指定することによって、〈対象要素〉を含む〈集合〉も設定できる。本研究の〈集合〉とは、〈対象要素〉と文脈の意味や話者の共通知識などにより形成される前提の下で設定され、〈他の要素〉が含まれるものである。

この定義をもとに、上接語句に注目しながらダケの用例を観察すると、ダケが上接する〈対象要素〉に対して、どのような意味的役割を果たすのかは、〈対象要素〉自体の意味特徴と、〈対象要素〉と同じ〈集合〉に所属している〈他の要素〉との関係によって決定づけられ分化すると考えられる。本稿でもこの定義に従い、従来詳述されてこなかった、ダケが形容詞、形容動詞に下接する場合を考察し、この見方の妥当性を検証する。ダケの下接語の特徴も考慮に入れながら詳細な分析を行う。

## 2. 「形容詞+ダケ」についての考察

ダケが形容詞・形容動詞に接続する場合、文中の位置によって、主に七つのパターンに分けることができる。また、原因を表すとされる「だけに・だけあって」、「早ければ早いだけ」のような慣用的な表現を含め、「形容詞+接尾辞」の「(っ)ぽい+ダケ」、「～にくい・やすい・づらい+ダケ」などの特殊な形式の用例も取り上げて分析する。

### 2.1 「形容詞+ダケ+格助詞」

「新潮文庫の100冊」と「小松コーパス」のテキストデータの実例の中には、「形容詞+格助詞+ダケ」がない。一方、「形容詞+ダケ+格助詞」については、次のように、ガ格の用例だけが見られるが、本稿の対象となる全211例中7例しかない。

(3)(4)はともに「取り柄」に関する〈集合〉である。(3)はその〈集合〉の中に、「やすい、おいしい」などのような〈他の要素〉も想像できる。〈対象要素〉と〈他の要素〉はともに性質を表すもので、単独の一個体として捉えられる。且つ、均質的に〈集合〉の中に分布している。この場合、〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈範列的な関係〉と考えられる。格成分となるダケ句では、ダケが基本的に〈集合〉の中で、上接語句((3)ならば「広い」という〈対象要素〉を指定する用法となる。

(3) ここは【広いだけ】がとりえの店で、あたしはきらいでした。(倉橋由美子『聖少女』)

(4) 【早いだけ】が取り柄、と返した。(再掲)

(3)(4)のように、格助詞が下接するダケ句では〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈範列的な関係〉であり、一定の対立性を持っている。よって、ダケが〈対象要素〉を指定すると同時に、〈他の要素〉に対して、排除する意味解釈も結果的に発生すると考える。これはいわゆる「とりたて」と記述されるものである。しかし、本稿では、「とりたて」は結果的に発生した機能で、ダケの本質的な機能ではないと考え、「とりたて用法」という言い方を避けたい。ダケに上接する〈対象要素〉の意味特徴によって、ダケの用法を改めて分類すると、(3)のようなダケは〈個体指定用法〉と位置づけられる。(4)も同様に説明できる。

## 2.2 「形容詞+ダケ+は」

「形容詞+ダケ+は」の場合、次の1例しかない。

(5)の「済むこと」に関する〈集合〉の中には、「苦しい」という〈対象要素〉のほか、例えば「痛い、痒い」などの〈他の要素〉も想定できる。〈対象要素〉と〈他の要素〉はともに感覚を表すもので、単独の一個体として捉えられるため、〈範列的な関係〉であると考えられる。ダケは〈対象要素〉の「身体の切ない、苦しい」を指定すると同時に、〈他の要素〉を排除する意味解釈もできる。ここのダケも〈個体指定用法〉である。

(5) 何の、【身体の切ない、苦しいだけ】は、生命が絶えればそれで済む。

(泉鏡花『歌行燈・高野聖』)

## 2.3 「形容詞+ダケ+で・では」

「形容詞+ダケ+で・では」の例は多く見られ、本稿の対象となる全211例の28.0%を占める。この「(性質を表す)形容詞+ダケ」に下接する「で」は手段を表す格助詞ではなく、「だ」の「て」形と考えられるものである<sup>1</sup>。

文脈から判断すると、(6)は「闇の中の状態」に関する〈集合〉である。〈対象要素〉「暗い」のほかに、〈範列的な関係〉を持つ「寒い・息苦しい」など〈他の要素〉も想定できる。〈対象要素〉と〈他の要素〉が一つの状態を表し、単独の一個体として捉えられる。よって、ここのダケは〈個体指定用法〉と考えられる。ダケは〈対象要素〉を指定すると同時に、「寒い・息苦しい」などの〈他の要素〉を排除する意味も表す<sup>2</sup>。

(6) 【暗いだけ】で、何も出なかったわ。(KS0570)

一方、(7)(8)のようなやや特殊な例もある。形容詞の前に副詞が上接する場合である。(7)の〈対象要素〉である「中途半端に貧しい」と〈他の要素〉である「徹底的に貧しゅう」などは単純に〈集合〉に分布している任意の要素ではなく、程度の差がある。つまり、「貧しゅう」に関するレベルに、異なった幾つかの段階があり、「貧しゅう」という尺度において、一定の

<sup>1</sup>奥津(1986b)では、「だけで」の「で」を「だ」の「て」形とされる「で」と手段を表す格助詞に分類する。「だけで」はそれぞれ「他者不要」と「他者否定」を表すとされる。

<sup>2</sup>また、「形容詞+ダケ+では」のような例もある。基本的に「形容詞+ダケ+で」と同様に考えられる。ダケは〈対象要素〉を指定する〈個体指定用法〉である。

例：たしかに物質文明はすばらしいが、それもここまで来ると、【すばらしいだけ】では済まされないのではあるまいか——と。(飯田経夫『「ゆとり」とは何か』)

順序づけられた複数の要素が存在する。この場合、〈対象要素〉と〈他の要素〉は〈序列的な関係〉と考えられる。ダケは「中途半端に貧しい」までを限定し、〈対象要素〉の範囲を指定する〈範囲指定用法〉と考える。

(7) 一生人間として生きのびても、死ぬまでに結局わずかししか人間的喜びを得られないということをとった連中やーきみらは、【中途半端に貧しいだけ】で徹底的に貧しくないから、そんな連中のこと考えへんかったやろ」私は冷たく言った。(KS0018)

(8)は(7)と同様に考えられる。〈対象要素〉「少々カッコいい」と〈他の要素〉「とても(カッコいい)」との間にも程度の差があり、「カッコいい」という尺度において、「少々カッコいい」と「とてもカッコいい」の順位がづけられている。よって、(8)の〈対象要素〉と〈他の要素〉も〈序列的な関係〉で、このダケは〈範囲指定用法〉とする。

(8) ただ、デザインが【少々カッコいいだけ】で、とてもじゃないが、おとなが、しかつめらしくとり組めるものじゃない。(KS1540)

## 2.4 「形容詞+ダケ+です・である・だ」

次に、「形容詞+ダケ+です・である・だ」について分析する。「形容詞+ダケ+です・である・だ」の例は一番多く見られ、本稿の対象となる全211例の30.3%を占める<sup>3</sup>。

(9)(10)のダケはそれぞれ〈対象要素〉「むずかしい」「めんどくさい」を指定し、「これ以外にない」という意味を表す。〈対象要素〉と〈他の要素〉はともに性質を表すもので、単独の一個体として捉えられる〈箇列的な関係〉である。ここのダケは〈個体指定用法〉と考えられる。

(9) きちんと筋道たてて思い出すことが【むずかしいだけ】である。

(井上昌次郎『睡眠の不思議』)

(10) というのは、たとえば、省エネがあ国でできるか。しかし、だれもそんなことは考えない。【めんどくさいだけ】です。エネルギー浪費は、世界一多いんじゃないでしょうか。(KS0940)

更に、(11)のように、比較文にも用いることがある。ダケは「パターンの特徴」に関する〈集合〉の中に、「振幅が常人より異様に大きい」という〈対象要素〉を指定し、「まがりくねった不規則な波数」などの〈他の要素〉を排除する。〈対象要素〉と〈他の要素〉は単独の一個体として捉えられる要素で、(11)のダケも〈個体指定用法〉である。

(11) 「そうーδ波のような、まがりくねった不規則な波数でなく、パターンは、あくまでα波であって、ただ、【振幅が常人より異様に大きいだけ】だ。その上……時おり棘波がはいる……」(KS0662)

## 2.5 「形容詞+ダケ+に・あつて」

「形容詞+ダケ+で・では」と「形容詞+ダケ+です・である・だ」のほかに、「形容詞+

<sup>3</sup> ここには、「です・である・だ」のほかに、「さ・やな・なのである・φ」の例も含めた。

例：帰って来たのが【うれしいだけ】さ。(ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』)

・でもこれは三つ重なってないア、単に【白いだけ】やな。(KS0212)

・このことからわかるように、ライオンに目をつけられたシマウマは単に【運が悪いだけ】なのである。(中原英臣・佐川峻『進化論が変わる』)

・ただ、あなたのほうが【小さいだけ】。(カポーティ『ティファニーで朝食を』)

ダケ+に・あって」の例も比較的多い。全 211 例中 30 例あり、14.2%を占める。

(12)は主句の事柄「その感動も新鮮なのにちがいない」を成立する条件として、一番ふさわしい理由は「めずらしい」であるという意味を表す。「だけに」は前件と後件の因果関係を表すほかに、「それ以外の理由も存在するが、これが一番相応する理由である」の意味も暗示する点が重要である。「〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係」から説明すると、後件の成立する条件という〈集合〉の中に、ほかの条件も存在するが、ダケは最適な条件としての〈対象要素〉を指定する。〈対象要素〉と〈他の要素〉はともに後件の成立を満足している条件の一つである。このような条件も単独の一個体として捉えられるため、このダケも〈個体指定用法〉と考えられる。(13)も同様に説明できる。

(12) この宗旨が【めずらしいだけに】、その感動も新鮮なのにちがいない。

(司馬遼太郎『国盗り物語』)

(13) 空気より重いなら【ベッドが高いだけに】やや安全だろう。

(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

また、「形容詞+だけに」の例が多いのに対して、「だけあって」の例は次の 1 例しかない。

「だけあって」は「だけに」とほとんど置き換えられるが、後件が否定的な評価である場合には、「だけあって」は使えない。(前田 2009)

(14) なるほど【すこし高だけあって】、そここの景色がよくみえた。

(司馬遼太郎『国盗り物語』)

「だけ」は「モノ・ヒト・コト」、具体的な動作など任意の〈対象要素〉を指定することがあるが、これに対し、「だけに」の場合、前件は後件の条件を満足しなければならないので、〈対象要素〉はある属性、性質、状態性を表すものとなる。形容詞はそれ自体、性質を示す品詞であるために、「形容詞+ダケ+に」の例も数多く見られると考えられる。

なお、「だけに・だけあって」は現代語において一語化し、接続助詞として原因を表すとされ、副助詞・とりたて助詞としてのダケと区別する先行論が数多く見られるが、三枝(1991)では、「だけ」<sup>4</sup>と「に」<sup>5</sup>の本来の意味も色濃く残していると述べ、「場面の限定性」という観点から「だけに」を次のように分析する。

話し手が「だけに」を使ってひとつの場面状況を取り立てるということは、逆に言えば P という場面状況があるから Q という状況判断が成り立つということで、そのため両件に因由性の関係が認められることが多い。ただ P と Q の結びつきは、因果関係ほどはっきりしたものではなく、話し手は Q という判断の根拠として P をあげるといった気持が強いと考えられる。(中略)「だけに」は、主文の成立する状況場面の内からもっともふさわしいと思われるものを取り上げるという関係である。その関係は実際には因果関係であることが多いが、話し手は、できるだけ主観をさけて、また、それが唯一の理由ではないという含みも持たせて事実に対する判断を提示しようとするときに用いる。

<sup>4</sup> 「だけに」におけるダケの「とりたて」について、三枝(1991)では、次のように説明した。

「高いだけにおいしい。」という文を考えた場合、おいしいという感情が生起する場合状況はいろいろ考えられる。「あなたが作ってくれた、肉が国産品である、みんながおいしいと言っている」など。このいろいろな場面の可能性の中から一つの P を、Q という判断もしくは状況の成立に特に関係あるものとして取り立てる、これが「だけに」の基本的な働きであろう。

<sup>5</sup> 三枝(1991)では、山口(1980)の「に」の分類(「場面性」「累加性」「機縁性」「因由性」「対立性」「仮定性」「志向性」)に従い、「だけに」の「に」の基本的な意味を「場面性」と考える。

「だけに」の基本的な働きについて、三枝(1991)の「場面状況を取り立てる」という角度からの説明は説得的といえるだろう。本稿の「〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係」という観点から、「だけに」を含めたダケの諸用法を説明する立場も基本的に三枝(1991)と矛盾しない。

## 2.6 「形容詞+ダケ+の+名詞」

次に、「形容詞+ダケ」が名詞を修飾する場合を見る。この場合、後ろの名詞との意味関係が重要である。「形容詞+ダケ+の+名詞」は全211例中26例である。

(15)(16)の「暑いだけ」「焼けばいいだけ」は、それぞれ「夏」「パン生地」を修飾する。「暑い」「焼けばいい」が名詞「夏」「パン生地」の性質を説明するものなので、「形容詞+ダケ」は名詞の量をはかるものではない。

(15)の「どのような夏か」を示す属性の〈集合〉の中に、〈対象要素〉の「暑い」と〈範列的な関係〉を持っている「雨が多い、天気がいい」などの〈他の要素〉も存在する。「暑い、雨が多い、天気がいい」などが単独の一状態(個体)と考えられるため、ダケは〈対象要素〉を指定する〈個体指定用法〉である。

(15) 私はソファに坐り、リングの向こうの窓の外をぼんやり眺めていた。不意に眼の前を赤い電車がよぎり、一瞬にして通り過ぎると、そこには一年前と同じただ【暑いだけ】の夏の午後があった。  
(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(16)も同様に考えられる。(16)のダケは条件表現を含む形容詞句の「焼けばいい」に下接し、「どのようなパン生地か」を示す属性の〈集合〉の中で、〈対象要素〉の「焼けばいい」のみを指定する。〈対象要素〉と〈他の要素〉が〈範列的な関係〉であるので、〈他の要素〉に対する排除の解釈もできる。(16)のダケも〈個体指定用法〉といえる。

(16) 売場の横には、ガラスでかこわれた一廓があって、【焼けばいいだけ】のパン生地を秤売りしている。  
(KS0471)

一方、次の「ほしいだけ」は以上の例と異なる。「ほしい」は感情を表す形容詞で、名詞の量を直接限定することができないが、(17)(18)のように「ほしいだけのお金」「ほしいだけ的人数」といった用例は見られる。(17)(18)の「ほしいだけ」はともに名詞「金」「人数」の量をはかるものである。それぞれ「欲しい分の金」「欲しい分的人数」の意味を表す。

(17) 万一彼が金を使いたいといえ、院代勝侯秀吉が、たとえ新しい借入金のごとでむずかしい顔をしていたその瞬間に於てもほとんど相好を崩して、すぐさま【欲しいだけ】の金を会計に命じてくれたか  
(北杜夫『楡家の人びと』)

(18) 【欲しいだけ】の人数を申されよ。将の名を名ざしされよ。  
(司馬遼太郎『国盗り物語』)

〈対象要素〉が量を表す時、単独の個体として捉えられないため、ダケはある範囲を示す。しかし、(17)(18)の「欲しい分」は発話者の把握できない量である。この場合、〈対象要素〉と〈他の要素〉はともに量を表すもので、その範囲は相対的・不定的である<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> (17)(18)は「ほしい」の主体が聞き手であるために「発話者に把握できない」用例である。一方「(私が)ほしいだけの古着をもらった」の場合、「ほしいだけ」は発話者が把握・確定できる量であり、〈範囲指定用法〉といえる。「ほしいだけ」の用法は、上接語によって絶対的に決まるのではなく、主体や文脈上設定可能な〈他の要素〉などの条件によって相対的に決まるものである。

よって、(17)(18)の「ほしい」は確定できない数・量であるため、〈対象要素〉と〈他の要素〉との境界線も不定的である。つまり、〈対象要素〉と〈他の要素〉は〈不定的な関係〉である。〈不定的な関係〉の場合、ダケは〈対象要素〉の範囲をはっきりと指定することができないため、本稿はこのようなダケを〈範囲提示用法〉とする。これはいわゆる「程度用法」と記述されるものである。<sup>7</sup>

## 2.7 「形容詞＋ダケ＋動詞(句)・述語」

「形容詞＋ダケ＋動詞(句)・述語」の例は全 211 例中 9 例しかない。

次のように、三種類に分けられる。一つは「形容詞＋ダケ」が副詞句として、動詞の「量・程度」を修飾するものである。この場合、ダケの省略はできない。奥津(1986)では、このようなダケを形式副詞と呼ぶ。

(19)の「ほしだけ」は副詞句として「あげる」の「量」を修飾する。〈対象要素〉〈他の要素〉ともに量を表すが、〈対象要素〉の「ほしい量」は「確定できない量」なので、不定的である。即ち〈他の要素〉との関係も不定的である。ダケは「確定できない量」をはかる場合、本稿では〈範囲提示用法〉と考える。

(19) ああ、いいよ。血止めでも血でも、【ほしだけ】あげるよ。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

一方、(20)の「途中の着陸地がすくないだけ」は副詞句として「まだましで」を修飾するものではない。このダケは、「北極まわりの属性」についての〈集合〉の中で、「途中の着陸地がすくない」という〈対象要素〉を指定し、〈個体指定用法〉である。2.3・2.5 節で述べた「だけに」「だけで」と同様、主節述語の原因・理由を示している<sup>8</sup>。

(20) それでも、この「北極まわり」は、【途中の着陸地がすくないだけ】まだましで、これが、「南まわり」コースをとると、えらい事になる。(KS1585)

また、(21)の「はやければはやいだけ」は慣用的な用法とされる場合が多いが、ここでも、同様に「〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係」という観点から分析する。「はやければはやいだけ」は「はやければはやいほど」とも置き換えられるように、述語事態の程度を表す。ダケは基本的に「進歩のスピード」の程度をはかる。しかし、「はやさ」は確定できない抽象的な量であるため、ダケはこの〈対象要素〉の範囲を指定することができず、〈範囲提示用法〉と位置づけられる。

(21) しかし、技術や機械の進歩のスピードが、【はやければはやいだけ】、それを人間が、どうやってつかいこなすか、新しい技術をつかって、どうやって人間の「理想」を実現して行くか、ということについての、よりたくましい「構想力」が必要にたってきます。(KS1107)

<sup>7</sup> また、次例「この女がほしだけだ」のダケは〈個体指定用法〉と考えられる。この場合、「ほしい」対象が明示されており、ダケは「はじめからの希望」という〈集合〉の中で、「この女がほしい」のみを指定し、「他の希望がない」ということを表す。

(例) はじめからただ【この女がほしだけ】だ、それを例によって遠廻りしていたのだと、島村ははっきり知ると、自分が厭になる一方女がよけい美しく見えて来た。杉林の陰で彼を呼んでからの女は、なにかすつと抜けたように涼しい姿だった。(川端康成『雪国』)

<sup>8</sup> 三枝(1991)では、「従属文、主文とも形容詞の場合には、「だけに」と「だけ」がかなり意味的に近く感じられると述べている。例：(a) 高いだけ、おいしい。

(b) 高いだけに、おいしい。

(三枝 1991 : p.58)

## 2.8 その他

ほかに、次のような「形容詞+ダケ+かもしれない」「形容詞+ダケ+や」「形容詞+ダケ+なのに」「形容詞+ダケ+になった」といった例もある。

- (22) ーまあ待ちたまえーなにもかも繊細で、頹廢的で、メランコリックな終末の空気を吸って育った君たちには、そう感じられないかも知れない。君たちには、“力”はもう【わずらわしいだけ】かも知れない。(KS1074)

(22)のダケは「“力”に対して推測する」〈集合〉の中に、「わずらわしい」という〈対象要素〉を指定し、「ほかの可能性」を排除する。同様に、(23)~(26)の「うす赤い」「うれしかった」「工事をうければよい」「逃げ足が遅い」も独立した一単位として〈他の要素〉との対立のもと捉えられるため、これらのダケも「個体指定用法」と考えられる。

- (23) それに髪の色が赤いといっても、【うす赤いだけ】や黒ずんだのではだめで、ほんとうに火のような、燃えるように赤いのでなければ資格がないとかいいます。

(コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』)

- (24) 吉川の手紙を見て、ほんとうは【うれしかっただけ】なのに、いかにも吉川の父の死を悲しんで、吉川のことを思いやっているような自分の手紙に、信夫は心がとがめた。(三浦綾子『塩狩峠』)

- (25) 第二号艦はほとんど完全な機能をそなえ、後は【呉海軍工廠の第四ドック内で最後の仕上げ工事を受ければよいだけ】になった。(吉村昭『戦艦武蔵』)

- (26) 【逃げ足が遅いだけ】ならまだしも、僅かな紙の重みの下で、あたかも梁に押えられたように、仰向けになつたりして藻掻かなければならぬのだった。

(梶井基次郎『檸檬』)

また、「形容詞+ダケ」が「でも」に上接する場合もある。(27)の「三十六万トンの原油に、魚雷をくつたら、想像できないことになる」という文脈からわかるように、「雷撃があること」は〈集合〉「戦争にあること」の中の任意の一要素ではなく、最悪の状況である。よって、「雷撃がないだけでも」の「でも」は最低限を表す。つまり、「よい状況」と「悪い状況」という尺度において、幾つかの要素が並んでいる。この場合、集合内の要素は自由に分布するのではなく、〈対象要素〉と〈他の要素〉が一定の順序づけられた、〈序列的な関係〉と考えられる。ダケは「雷撃がないこと」という最低限の範囲までを指定する〈範囲指定用法〉と考えられる。

- (27) ふつうの戦争じゃないから、【雷撃がないだけ】でもまだいい——と駆逐艦のりだった船長は、すさまじい熱気を吐く、新東京駅ほどのひろさのある甲板を見つめながら思った。三十六万トンの原油に、魚雷をくつたら、いったいどんな事になるか？

(KS0762)

以上では、「形容詞+ダケ」を下接する要素毎に、すなわち文中での位置によって考察した。次に、「～にくい・やすい+ダケ」「～(っ)ばい+ダケ」を特殊な形式の用例として取上げて、上接語句の意味的な特徴を観察する。基本的に「形容詞+ダケ」の場合と同様の傾向である。

「～にくい・やすい・づらい」は動詞に接続し、動作の難易度といった性質を表すものである。形容詞と一緒に分析する。(28)~(30)のように、「憶えやすい」「憶え出しにくい」「読みづらい」は一つの複合語として述部を構成している。ダケは上接する述部の全体に関わると考えられる。以下具体例で確認する。

- (28)(29)のダケはともに否定の文脈にあるが、それぞれ「憶えやすい」「憶い出しにくい」



という〈対象要素〉を指定し、これだけではなく、例えば、「歴史上の出来事の順番を間違えたりすることが少なくなります」「なにを記憶するかを選択も不適切になってしまいます」の〈他の要素〉とを対比させる文脈である。〈対象要素〉と〈他の要素〉は一つの独立した個体として捉えられるため、このダケは〈個体指定用法〉と考えられる。(30)の「読みづらいだけ」も同様に説明できる。ダケは「動詞+にくい・やすい・づらい」句の全体に関係する。

(28) そうすれば、【憶えやすいだけ】ではなく歴史上の出来事の順番を間違えたりすることが少なくなります。  
(千葉康則『記憶の脳生理学』)

(29) つながりがないと個々の記憶も困難だし、【憶い出しにくいだけ】ではなく、なにを記憶するかを選択も不適切になってしまいます。(千葉康則『記憶の脳生理学』)

(30) 【読みづらいだけ】でなく、読むリズムが平板になります。

(高田宏『エッセーの書き方』)

次に、「(っ)ばい+ダケ」の例を分析する。「(っ)ばい」は接尾辞で、名詞に接続すると、形容詞化する性質を持っているので、ここでも、形容詞とともに観察する。

(31)の「子供っぽい」は「子供のような性格」という意味で、程度・量を表すものではない。

(31)の「子供っぽいだけ」が取り柄は、「取り柄」の〈集合〉の中に、ダケが「子供っぽい」という〈対象要素〉を指定し、「おとなしい、やさしい」などの〈他の要素〉を排除する。〈対象要素〉と〈他の要素〉は単独の個体として捉えられるため、ダケは〈個体指定用法〉である。

(31) 「ナポレオン・ソロ」にいたっては、【子供っぽいだけ】がとり柄で――時々部分のおもしろいアイデアはありますが――ふざけ方の徹底している点、「OOH」の方がまだしもです。  
(KS0226)

### 3. 形容動詞

「形容動詞+ダケ」の場合は、基本的に形容詞と同様に説明することができる。しかし、「形容動詞+ダケ」の特徴として、「必要なだけ」「好きなだけ」のような抽象的な量を表す例が多いことが指摘できる。

#### 3.1 「形容動詞+ダケ+格助詞」

「形容動詞+ダケ+格助詞」の例には、次のように、ヲ格、ガ格しかない。全146例中4例である。

(32)の「必要なだけ」は「作る」の目的語で、「必要な分」を表すものである。〈対象要素〉「必要な分」は抽象的な量で、範囲の確定できないものである。この場合、ダケが〈範囲提示用法〉と考えるのは一般的である。

(32) そしてその中で、ますます貫徹された工程技術革新の重視は、必要なモノを必要な時に【必要なだけ】作るという、フレキシブルな生産システムの構築に結びついていくことになる。  
(下川浩一『日本の企業発展史』)

しかし、(32)のような特別な文脈において、次の分析もなりたちうる。(32)の「必要なモノを必要な時に必要なだけ作る」では、「必要」が三回繰り返された結果、「不必要に作らない」という意味も表す。よって、〈対象要素〉は「必要な分」、〈他の要素〉は「不必要な分」になる。(32)のように、集合の中に〈対象要素〉と〈他の要素〉の二つの要素しかなく、且つ強い対比性を持っている場合、〈対象要素〉と〈他の要素〉は〈対立的な関係〉であると考えられる。〈対

象要素)と〈他の要素〉が対立的であり、独立した二つの個体として捉えられるため、ダケは〈個体指定用法〉と考えられる。この場合、ダケは〈対象要素〉を指定すると同時に、〈対象要素〉と強い対比性を持つ〈他の要素〉を排除するという意味も結果的に発生しやすい。

〈対立的な関係〉は〈範列的な関係〉の一種の特別な関係として理解できるが、ただし、〈集合〉の中に、二要素しかないという関係は述部や文脈に非常に深くかかわっている。二要素の強い対比性がなりたちうるかどうか、文脈によって決まるといえる。

一方、(33)(34)のダケは「取柄」という〈集合〉の中に、それぞれ〈対象要素〉の「おとなしいのと無口な(性格)」と「丈夫な(こと)」を指定する。「取り柄」の〈集合〉の中に、〈他の要素〉も存在するが、ダケは〈他の要素〉を排除する。「形容詞+ダケ」と同様に把握できる。ダケは〈個体指定用法〉である。

(33) 梶鮎太は、戦争中に遅い結婚をして、【おとなしいのと無口なだけ】が取柄の平凡な妻と二人の幼児を持っていた。(井上靖『あすなる物語』)

(34) 【丈夫なだけ】が取り柄だって、二人でよく笑った。(KS1550)

### 3.2 「形容動詞+ダケ+は」

「形容動詞+ダケ+は」の場合、次の1例しかない。

(35)の文脈によると、「十分なだけ」は「紙幣と豚肉と馬鈴薯」の量を指すものと分かるが、確定できない数量なので、〈対象要素〉の範囲も不定的である。ダケは確定できない量をはかっており〈範囲提示用法〉と考えられる。

(35) 「これを取っていただきてえんでさ、それと——」彼は豚肉と馬鈴薯を指さした。(中略)「あそこまで行くに【十分なだけ】はあるだよ」と父親が言った。(スタインベック『怒りの葡萄』)

### 3.3 「形容動詞+ダケ+で」

この「で」も「だ」の「て」形と考えられるものである<sup>9</sup>。(36)のダケは「心がきれい」という「性質」を指定し、「特殊な才能」などの〈他の要素〉と対比させ、「特殊な才能がない」のように、〈他の要素〉を排除する。(36)のダケも〈個体指定用法〉と考えられる。

(36) 【心がきれいなだけ】で、特殊な才能がなけりゃ、はたらきづめにはたらいたところで、日に十五コペイカもかせげませんよ！(ドストエフスキー『罪と罰』)

(37)のダケは〈対象要素〉の「例の石舞台が若干不思議」という特徴を指定し、「珍しい古墳ではない」のように、〈他の要素〉を排除する。(37)のダケも〈個体指定用法〉と考えられる。

(37) 調査の結果は、【例の石舞台が若干不思議なだけ】で、さまで珍しくない古墳の一つである、という結論が出ただけだった。(KS0579)

また、「形容動詞+ダケ」の多くを占める「必要なだけ」は、量を表す場合と3.1で見た(32)のように「必要な分」と「不必要な分」を対比させる場合もあるが、(38)の「運動が必要なだけで」は、話者の「運動」についての意見という〈集合〉の中で、「必要」という〈対象要素〉を指定する。〈範列的な関係〉を持っている〈他の要素〉は問題にせず、「他意はありません」と続けている。この場合のダケは〈個体指定用法〉と考えられる。

<sup>9</sup> 形容詞の場合、「ダケ+で」「ダケ+だ」の例が一番多いが、形容動詞の場合、「ダケ+述語」「ダケ+の名詞」が一番多く見られる。「形容動詞+ダケ+で」は全146中19例である。

(38) すみません、あなたを怒らせるのがわたしはいちばん恐いんですよ、わたしにはただ【運動が必要なだけ】で、別に他意はありません。(ドストエフスキー『罪と罰』)  
以上から、同じ「必要なだけ」であっても、異なる文脈においては解釈も、ダケの用法も異なることがわかる。ダケに下接する成分によって文中での位置も見なければならない。

### 3.4 「形容動詞+ダケ+の+名詞」

「形容動詞+ダケ+の+名詞」の例は「形容動詞+ダケ+の+名詞」より多く見られる。全146例の21.9%を占める。(39)「子供っぽい、無邪気なだけ」(40)「言葉の表面と論理的なだけ」はそれぞれ名詞の「少女」「理解」を修飾する。ダケは「少女」「理解」の程度・量をはかるものではなく、「どのような少女か」「どのような理解か」を示す属性の〈集合〉の中で、〈対象要素〉を指定し、〈他の要素〉を排除する〈個体指定用法〉と考えられる。

(39) 女子大学の入学試験には僕が付き添って行ったものだが、その頃から、今迄のただ【子供っぽい、無邪気なだけ】の少女に、女性としての自我が次第に目覚めて来た。  
(福永武彦『草の花』)

(40) ただ【言葉の表面と論理的なだけ】の理解が、おそらくは誤解の上に誤解を重ねていくだけに終わる危険があるのに対し、やや真実に近よりうという利点があることである。  
(会田雄次『日本人の意識構造』)

次に、この類型で顕著に見られる「好きなだけ」「充分なだけ」「必要なだけ」の例を見ていく。(41)の「権謀術数が好きなだけ」は「人物」を修飾する。ダケは「どのような人物」という〈集合〉の中で、「権謀術数が好き」という要素を指定し、〈他の要素〉を排除する〈個体指定用法〉である。

(41) 「エドについては、すご腕の大もの政治家という神話ばかりが、喧伝されすぎたきらいがあるが、本当の彼は、【権謀術数が好きなだけ】の人物じゃない。(KS0009)

これに対して、(42)の「好きなだけ」は「原稿枚数」を修飾し、「原稿枚数」の量を表すものである。「好きな量・程度」が把握できないものであるため、ダケは「好きな量・程度」の範囲を示す〈範囲提示用法〉である。また、(43)(44)の「充分なだけ」と「必要なだけ」はそれぞれ「広さと長さ」「金」の量を表す。「充分な量」「必要な量」も確定できないものであるため、このダケは(42)と同様に、〈範囲提示用法〉と考えられる。

(42) 好きなテーマについて、好きなだけ取材をし、【好きなだけ】の原稿枚数を書く、ということをして許してくれていた。  
(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(43) 運搬車は大柄な男を載せるのに【充分なだけ】の広さと長さをそなえていた。  
(大江健三郎『死者の奢り・飼育』)

(44) 【必要なだけ】の金がなかったので、ジャンヌに言った。(モーパッサン『女の一生』)

### 3.5 「形容動詞+ダケ+・です・である・だ」

「形容動詞+ダケ+です・である・だ」の場合も形容詞と同様に考えられる<sup>10</sup>。

<sup>10</sup> 「だけよ・だけなのよ・だけなんだ」の例も含める。全146例中18例ある。  
例：・ただ、【コーデリアのほうをもっと好きなだけ】よ。(モンゴメリ『赤毛のアン』)  
・でもそれは愛情じゃなくて、【功利的なだけ】なのよ。(北杜夫『楡家の人びと』)  
・だから男を大勢集めて、【無邪気に、賑やかに、馬鹿ッ騒ぎをするのが好きなだけ】なんだ。  
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

(45)(46)のように、「ダケだ」はそれぞれ「非現実的」「お互い面倒」を指定し、「他にはない」という意味を表す。〈対象要素〉と〈他の要素〉が、一つの性質で、単独の一個体として捉えられ、〈範列的な関係〉であるため、ダケは〈個体指定用法〉である。

(45) ただ【非現実的なだけ】だった。 (飯田経夫『「ゆとり」とは何か』)

(46) それにそんなことしたって何の役にも立たない。【お互い面倒なだけ】だ。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

### 3.6 「形容動詞+ダケ+動詞句」

形容動詞の場合、「形容動詞+ダケ+動詞句」の例が一番多く見られ、全 146 例の 31.5% を占める。「好きなだけ」は慣用的な用法ともされるが、動詞句を修飾する場合、次の(47)(48)のように、「好きなように、ここにありますわ」「好きなように、ぼくを軽蔑してくれていいから」の意を表す。文脈によって「好きな」は抽象的・相対的な量・程度を表すもので、且つこの量・程度は確定できない。従って、このようなダケはともに「範囲提示用法」である。

(47) わたくしちょっと縫いものを持って参りまして、いつまでも【お好きなだけ】ここ  
におりますわ。 (エミリー・ブロンテ『嵐が丘』)

(48) 【好きなだけ】ぼくを軽蔑してくれていいから。 (エミリー・ブロンテ『嵐が丘』)

また、(49)の「十分なだけ」は副詞句として、「自分の時間をもつことができる」を修飾し、動詞句の程度を表す。ダケは「十分な量」をはかって、同様に〈範囲提示用法〉と考えられる。

(49) 私は『馬とその見分け方』という本に興味を感じているふうを装っていたおかげで、  
ホリーの友人たちの品定めをするに【十分なだけ】自分の時間を持つことができた。

(カポーティ『ティファニーで朝食を』)

### 3.7 その他

以上のほか、ダケの後ろに「なら」「か」というと「かもしれない」が下接する例もある。

(50) 【無意味なだけ】ならまだいいが、危険でもある。(飯田経夫『「ゆとり」とは何か』)

(51) でも、ニュートンは【バカなだけ】かという、そうじゃないだろう(笑)。(KS0195)

(52) それとも単に鳥たちは【雨あがりが好きなだけ】かもしれない。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

(50)~(52)のダケはそれぞれ「無意味」「バカ」「好き」を指定し、〈他の要素〉を排除する〈個体指定用法〉である。

また、形容動詞の場合も、原因を表す「だけに」に上接する例が数多く見られるが、形容詞と同様に説明できるため、ここでは省略する。次の(53)の原因を示さない「だけに」を分析する。(53)の「必要なだけに」は「制限してしまった」を修飾し、副詞的な成分である。ダケは確定できない量をはかって、〈範囲提示用法〉である。

(53) 彼は残忍なほどに吝嗇な本性を現わして、けっして心づけなど与えたことはなく、  
食事も厳密に【必要なだけ】に制限してしまった。(モーパッサン『女の一生』)

更に、接続方法において、次のような特殊な例もある。(54)の「同じ」はダケに上接する場合、「同じなだけ」ではなく、「同じだけ」となる。ダケの用法を分析すると、(54)「前と同じ(給料)」が確定できる数・量なので、〈対象要素〉と〈他の要素〉の境界線も把握でき、〈対象要素〉は〈他の要素〉に含まれることがわかる。この場合、〈対象要素〉と〈他の要素〉は〈包摂的な関係〉になる。このダケは確定できる数・量をはかる〈個体指定用法〉と考えられる。

(54) 給料も【前と同じだけ】くれるというし、手に職がつけば、いつか独立できるしね。  
 その方が、こいつのためにもいいしね。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(55)の「わずか」も形容動詞であるが、副詞的に用いられるため、「わずかだけ」となると考えられる。(55)のダケは確定できない「わずか」の量をはかるので、〈範囲提示用法〉とする。

(55) 【わずかだけ】顔を出した欧州、かなり長いことつきあっていたがもともと酒の飲めぬ院代や医局の医師たちも去り、ついには七、八人の看護人と薬局の者が残るばかりになった。(北杜夫『楡家の人びと』)

#### 4. おわりに

本稿では、「形容詞・形容動詞+ダケ」におけるダケの諸用法について詳細な考察を行った。

従来の「とりたて」「限定」「程度」などの用語をあえて使わず、ダケの上接語句の意味特徴によって、用法を改めて分類した。まず、〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係は〈範列的な関係〉〈対立的な関係〉〈序列的な関係〉〈包含的な関係〉〈不定的な関係〉の五種類に分けられる。この五つの関係はダケの上接する〈対象要素〉が単独の一個体なのか、確定できる数・量なのか、確定できない数・量なのかの判断の基準となる。この基準によると、「形容詞・形容動詞+ダケ」の場合、ダケには事物の性質・状態、人の感情等、単独の一個体として捉えられる〈対象要素〉を指定する〈個体指定用法〉、「前と同じだけ」のような確定できる数・量をはかる〈範囲指定用法〉と、「ほしだけ」「必要なだけ」「すきなだけ」などのような「把握できない量・程度」の範囲を示す〈範囲提示用法〉がある。この結果は、張(2010)で行った、上接語句が名詞・動詞などの場合とも並行的である。このように、本稿はダケの諸用法について同一の観点からダケを分析し、単純化を試みたものである。

また、形容詞ダケ句と形容動詞ダケ句の其々の特徴について、以下のようにまとめられる。

「形容詞+ダケ」の上接語句としての形容詞は性質を示すものであり、単独の一個体として他と範列的に捉えられる性質を指定する〈個体指定用法〉が多い。〈個体指定用法〉は特に文中での位置に制限されないが、「形容詞+ダケ+で・では」と「形容詞+ダケ+である・です・だ」の例が最も多くを占めている。また、この〈個体指定用法〉では、原因・理由を表すとされる「だけに」の例も多くみられる。主文述語は状態性述語に偏る。「だけに」のような「形容詞+ダケ」句が連用修飾句として用いられる場合、指定された「性質」が、主節の判断に結びつけられ原因理由の解釈が成り立つと考えられる。このような原因理由の解釈の用例が「形容詞+ダケ」句に多いという事実は、形容詞それ自体、性質を示す品詞であることと関わっていると考えられる。一方、〈範囲指定用法〉と〈範囲提示用法〉の例はほとんど「形容詞+ダケ+の+名詞」と「形容詞+ダケ+動詞・述語句」に集中している。

「形容詞+ダケ」と比べて、「形容動詞+ダケ」の特徴の一つとしては、「形容詞+ダケ+の+名詞」と「形容詞+ダケ+動詞・述語句」の例が一番多く見られることが挙げられる。そのうち、「好きなだけ」「必要なだけ」の例が多くを占めている。「好きなだけ」「必要なだけ」は量を表す場合、〈範囲提示用法〉とされるのが一般的であるが、「ダケ+である・です・だ」構文において、一種の感情として単独の一個体とされるものもあり、〈個体指定用法〉も認められる。従って、上接語句が同じ語彙形態であっても、文脈上その〈対象要素〉がどのような集合を前提とし他の要素とどのような意味的關係構成しているかを具体的に分析しなければならない。ダケの用法の分化もこの点で条件付けられていると考えられる。

## 参考文献

- 安部朋世(1999)「ダケの位置と限定のあり方」『日本語科学』6
- 庵 功雄(2001)「とりたて」『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 梅原恭則(1989)「副助詞の構文的職能」『講座日本語と日本語教育 第四巻』明治書院
- 奥津敬一郎(1986a)「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 奥津敬一郎(1986b)「とりたて詞の分布と意味—「でだけ」と「だけで」—」『国文目白』25 日本女子  
大学国語国文学会
- 近藤泰弘(1983)「副助詞の体系—現代日本語—」『日本女子大学紀要・文学部』32
- 三枝令子(1991)「「だけに」の分析」『言語文化』27 一橋大学
- 澤田美恵子(2007)『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 重見一行(1996)『日本語の文法を考える』和泉書院
- 城田 俊(1987)「副助詞について」『国語国文』58-3
- 張 培(2010)「現代語ダケの諸用法—用法分化の条件と連続性」日本語学会 2010年秋季大会予稿集
- 丹羽哲也(1992)「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44.13 大阪市立大学文学部
- 丹羽哲也(2001)「「取り立て」の範囲」『国文学解釈と教材の研究』46(2)学燈社
- 沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
- 半藤英明(1997)「「取り立て」から見た係助詞と副助詞」『成蹊国文』31 成蹊大学国語国文学会
- 半藤英明(1998)「「限定」と「取り立て」の視座」『國語國文』第67巻第3号
- 半藤英明(2005)『日本語助詞の文法』新典社
- 前田直子(2009)『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 宮地朝子(2007)『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』ひつじ書房
- 森田良行(1972)「「だけ」「ばかり」の用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要 10』

## 資料

『CD-ROM版新潮文庫の100冊』新潮社

コーパス：「小松左京コーパス」(40.0MB)総合研究大学大学院小松左京コーパス作成委員会作成 (用例に示したKS以下の数字はコーパス内の数字によるものである。以下では、所収の作品名・ファイル名を示す。)

(KS0570：夏の終り / KS0018：日本アパッチ族 / KS1540：明日泥棒 / KS0940：社会と文化 哲学や幸福は  
どうなるだろう / KS0662：飢えなかった男 / KS1074：神への長い道 / KS0226：あなたもスパイになれ  
る / KS1585：旅ゆかば / KS0762：見知らぬ明日あす / KS1550：夜の声 / KS0579：果しなき流れの果に /  
KS0009：さよならシュビター / KS0212：S F 川柳《浪花篇》 / KS1107：世界にむかって口を出せ / KS0195：  
S F ってなんだっけ？ 第三回 / KS0471：ボルガ大紀行

飯田経夫(1982)『「ゆとり」とは何か』講談社 / 会田雄次(1972)『日本人の意識構造』講談社 / 下川浩一(1990)  
『日本の企業発展史』講談社 / 千葉康則(1991)『記憶の脳生理学』講談社 / 井上昌次郎(1988)『睡眠の不  
思議』講談社 / 中原英臣・佐川峻(1991)『進化論が変わる』講談社 / 高田宏(1984)『エッセーの書き方』講  
談社)

(ちょう ばい/日本語学)